

山折哲雄編著〈アジアの環境、文明、人間〉・pp.148 - 163・東京…法蔵館。1998。

## 台湾先住民の環境観

ダム建設反対運動の分析から

黄智慧

### 一 はじめに

台湾は地理的にはユーラシア大陸の東方の花綵列島に位置し、気候の面ではともに大陸性気団と国土に沿って流れる西太平洋の海流の影響を受ける。地形的には山岳地と丘陵地が国土の約三分の二を占め、山々の傾斜はきつく、そのため河川は短く流れも急である。降雨の時期と分布は偏っており、雨は夏の数カ月に集中し、冬は枯水期となる。これは洪水と旱魃の問題を生む。そのため水資源の開発、利用及び管理は台湾に住む人々の生活に深く関与してきた。

水の社会的利用に関しては、とりわけ水田耕作が盛んであり、西部の沖積平野に人口の約七五パーセントが集中している。さらに一九世紀後半から始まった工業化と都市化の現象は、特定地域の水の需要を大幅に増加させた。しかし、石油やガスなどの天然資源に恵まれず、このため水力発電が自ら賄える唯一の電力源であった。これらの事情からダム建設は近年台湾における工業用水や生活用水の問題を解決する唯一の方法と見なされた。

人類の発展において、ダムは人間が自然環境を制御しようとした最も古いものの一つである。五千年前のエジプト、バビロン、インド、ペルシャ、中国などに興った古代文明の発展は水利工事の発達と密接な関係があった。つまり、ダムとは自然に対抗した文明として最も重要な象徴にはかならない (Withfogel 1957)。しかし、今世紀末世界各地のダム建設はテクノロジカル植民主義とまで言われ、先住民からの疑問と抵抗を期せずして受けている (Cohen, 1994)。台湾にも同じ現象が起こっている。南部の山地に居住する魯凱族 (Rukai) が、一九九四年初頭から政府の計画するダム建設に対し抗議運動を始めた。ほかの国の先住民族と偶然にも一致し、彼らが近年伝統的かつ自然主義的生態哲学を提唱し、文明への反撃を開始した。このことは一体何を示唆しているのか。

本稿の目的は、魯凱族によるダム建設計画反対を民族誌的資料を背景に分析し、そこに表れた環境観と彼らが今日台湾の社会において陥っている挫折と苦境について考察を加えることである。さらに、それが示す台湾社会の抱える異質の文明と文化の不均衡な歴史的発展、そこに表れる環境観の不一致にかかわる問題にも言及し、環境と文化、歴史、民族との関係を再考したい。

## 二 好茶村魯凱族の文化と自然

一九九三年秋から台湾南部で始まったダム建設反対の中心は屏東県霧台郷好茶村の魯凱の人々であった。魯凱族の総人口は約六千人で、中央山脈南部を挟んで暮らしている。好茶村は西部魯凱族の中でも最も古い集落であり、自分たちの起源について次のように語る。

祖先は、台湾の山地で最も賢い動物である雲豹について東南海岸から高くそびえる山脈を越えて、清冽な泉

の湧く山間にやってきた。そしてそこで暮らし始めたのが現在の好茶村である。

このような伝説から、好茶村の魯凱の人々は自分たちを「雲豹の後裔」と好んで自称する。そして祖先の教えとして雲豹を殺すことは禁じられており、もし殺した場合にはひどい罰を受けるとされている。雲豹は台湾に生息する稀少な大型動物であるが、生態環境の破壊と人々による毛皮を目的とした乱獲のために、近年絶滅したと言われている。現在雲豹は好茶村の村人の伝説のみに登場し、神聖な動物として彼らの信仰を受けている。雲豹の他にも魯凱の人々は台湾の山地に出没する最も毒性の強い百歩蛇についても古来より伝説を持っている。貴族の娘が百歩蛇の化身である王子に嫁したという話である。そのため魯凱語で百歩蛇は「長老」を意味し、山中で遇うと、まず道を開けてもらおうようお願いし、人間に捕殺されないように言葉かけるといふ。台湾で最も畏怖されている動物と人間が神話や伝説のなかで調和して結びついている例は、他の山地先住民にも多く見ることができる。魯凱族には文字がないが、歴史は神話や伝説として口承される。

台湾の先住民族がいつ頃から台湾に住み始めたのかは、現在学界においても明らかではないが、四〇〇年前に東南中国の沿海部から漢民族が台湾の西部平原に入植したことは確実であり、その後漢民族の移住や通婚、交易争いの結果、平地及び丘陵地に住む約十の先住民族が漢民族と同化の末に消滅し、ついには漢民族が台湾で最も大きなエスニック集団となった。だが、広大な中部山地と台湾東部に住む先住民族は、首狩りの風習を維持しながら、清王朝の台湾での支配が終わるまで、一貫して漢民族への同化を拒み、彼らの侵入を阻止し、各々のテリトリーを守り続けた。

一八九五年から日本の明治政府が近代国家体制のもと、台湾で植民地経営を開始した。先住民の抵抗を何度も受けつつ、ついには先住民の住む全区域を掌握し、彼ら固有の生活習慣を変える政策を推進した。首狩り、刺青、

技術などの習俗を厳しく禁じ、山地焼畑農業に替わる水田耕作の奨励と指導を行った。だが、日本の影響は日本の敗戦とともに弱まり、その後国民党の敗走とともに、約二〇〇万人の漢民族が大陸から台湾に避難してきた。

戦後の台湾では、漢民族が絶対多数であり、主導的地位を占めた。漢民族の政府は日本が作った教育と治安の施設を用いて、漢民族と同様の教育、社会政策を実施した。基本的には山地は山地保留地政策のため、ある程度平地からの入植開墾が制限された。しかし山林の大部分は日本統治時代に国有化されており、戦後は漢民族の政府によって接収された。先住民は台湾社会で政治的にも経済的にも下層の民となった。先住民の平均年収は台湾の平均所得の半分にも及ばない。現在、先住民九族の人口総数は約三五万人で、台湾の総人口の二パーセント足らずである。魯凱族はその先住民の中で三番目に人口数が少ない弱小のエスニック集団である。

弱小集団ではあるが、魯凱族は海拔一〇〇〇メートル前後の台湾南部の山間部に居住するため、その険しい地勢が天然の防壁となり、数百年にわたって自分たちの生活文化空間を維持してきた。隘寮溪のほとりに住む魯凱族のなかで、好茶村が最も大きく、最も多いときには人口が一〇〇〇人を越えた。人口が生態環境の許容を越えた場合、村人の一部が近隣の山地に移住し、新たな集落を形成した。好茶村以外の霧台郷の集落は、多くは好茶村からこのように分村したものである。

他の台湾の山地先住民族と同様にかつて好茶村の魯凱人の主な生業は居住地、農地、漁場、狩猟場でなされ、自給自足であった。主要作物は山地焼畑農業で生産されるアワ、里芋、サツマイモ、落花生などの旱魃に強い穀物である。畑は三、四年間耕作した後、数年の間休耕し、雑草の灰を肥料として撒いて地力が回復した後に再び耕作する。この農法は灌漑施設を必要としないが、畑を休耕するためにある程度の広さが必要である。このほか、蛋白源を得るために森での狩りや河川での漁、および小規模な養畜を行う。さらに亜熱帯の森林からは野菜や蜂

蜜、果物が採れる。好茶村の人々の記憶には食べ物に困ったことはない。塩と金属製の容器類のみは自給できないため、平地の漢人との交易によって得ていた。社会組織の面では、父系的に長男が継承する家屋が中心となる。各家々は頭目と貴族、役割を持った平民に分けられ、精密に分化した社会階層がある。社会階層は生得的に決定されるが、決して不変なものでなく、婚姻の結びつきや集落への貢献によって、階層が絶えず上下し、調整される。社会の構造と秩序はその流動性のなかで、安定を保つのである（笠原、一九九三）。貴族の中には、宗教や農耕狩猟の年中儀礼を司り、天災や凶事を予測し、集落の歴史を記憶する者がいる。平民の中には、狩猟にすぐれたものや彫刻に専従する者、斥候のような役割を果たす者がいる。魯凱社会の文化には農耕、労働、狩猟、宗教、口承伝説、建築、芸術、遊戯競技などが含まれ、事実上それらは密接な関係にある。このような社会文化はまたその生活の基盤となる自然環境と不可分な関係にある。

自然環境は好茶村の魯凱の人々にとって、実質的な生活空間であると同時に象徴的な神聖空間でもある。社会組織の最も基本的な単位である「家」は、魯凱語で「balio」と言い、その概念は「家屋」のほかに、「故郷」や「落ち着くところ」を意味する。伝統的に葬式は自分が生まれた家屋内で行われ、さらに家（すべてスレート板で作られている）の中央の柱の床板の下に埋葬される。人は亡くなると想像上の大都市へ行くこととされ、祖先の靈魂はすべて baluguan と称される場所に住むとされる。baluguan は好茶の集落から東北に望む山の頂上である。もし、狩猟の折にその地を通る場合には、必ず儀礼を行う。baluguan 以外にも、好茶の集落から望む最高峰の北大武山（標高三一八〇メートル）や好茶村を取り巻く山々および湧き水の水源である井歩山とそれぞれが神聖な意味を持ち、自然界の生物や祖先の靈魂とともにひとつの魯凱人の「家」空間を構成している。また、「魯凱 (rukai)」という言葉は、周辺の民族の間では「寒冷な山上に住む人」を意味し、魯凱語では「森林」を意味す

る。

二〇世紀以降、伝統的な好茶村の自主性は、国家およびその他のエスニック集団から絶えず脅かされた。日本が山地での支配を確立した後、頭目や貴族が平民から税を徴収することが禁止され、頭目や貴族の権威は大幅に弱められた。戦後以降、平地化政策の影響を受け、交通や医療、教育の不自由が大きな問題とされた。政府の奨励のもと、好茶村の住民は下流の川辺に移住することを決定した。「生活環境の改善と更なる発展の追求」という目標のもと、移住は一九八〇年に完了した。新しい村の名前は「好茶」の名を採用した。新しい村と旧村とは徒歩で三時間ばかり離れており、新好茶村から平地人の村落まで車で一五分程度である。村落での建物は一定の規格に基づき設計され、家の建築費のローンを政府に返済するために現金を用意しなければならず、ここ数十年、どの家も債務を返すための現金を得ることに頭を悩ませている。また青年や壮年の大部分は、仕方なく都会に出て底辺の労働者となるか船員になっている。皮肉なことに移住の結果、集落の人口の流出が加速され、一九九〇年には人口が五〇〇名足らずとなり、就学年齢の児童数不足のため、集落唯一の小学校の分校が閉鎖される運命となった。

ここ十余年の好茶集落の社会文化の急速な瓦解を経験し、移住後の辛酸を嘗めた好茶村の人々は、しばしば後に呼応する二つの文化振興運動をほぼ同時に始めた。このような運動はどのような意味をもっているのだろうか。次節で探求する。

### 三 瑪家ダムの抗議に関する論述

## 運動の契機

一九八〇年に平地により近い新好茶村に移住した後も、若い人々の流出は続いた。最初は郷愁の思いから老人たちが旧好茶の家を懐かしみ、たまにそこを訪れたりした。一九八七年彫刻にたけた一人の老人がひどく崩壊した石板の家を修理し始め、その後長期にわたって元の村の実家で芸術の仕事に従事した。しばらく後に仕事を求め平地に移り住んだ多くの青年や壮年が、数年にわたって不平等な差別と挫折を味わった後、旧好茶に戻り始めた。彼らは旧好茶での生活哲学の素晴らしさを真剣に考えた。本来これらの人々は移住開始当時最も移住を望み、平地化する利点を求めた急先鋒であったが、一九九四年二月ついに「旧好茶探訪の旅」の活動を始め、新好茶の魯凱人一〇〇名あまり（その多くが移住後初めて帰村するものたちであった）を連れて、旧好茶の家を探訪した。

この活動の中心人物はアオヴィニ・カロス (Auvin Kalos) で、もともと彼は歴史を司った家の末裔である。再思三考の末、彼は平地の仕事を放棄することを決め、まるで「祖霊の導き」に促されるかのように旧好茶に戻って生活を始めた。そして人々にも旧好茶での生活を始めるよう呼びかけた。

このような一度だけの短い探訪活動では下流に移ったという新好茶の事実を変えることはできなかった。旧村への帰村を大多数の人は足踏みし、村人全員が帰村して以前のような生活を回復することは不可能であるとわかった。しかし、探訪活動から村人は新好茶と旧好茶が文化的に切っても切れないつながりで結ばれていることを理解した。旧村落が失われたため、人々は精神的支えや魂の故郷を失ってしまったが、新村落が彼らにとって平地と旧村落の間の窓口として両方の行き来のできる唯一の居場所になっていることも理解した。

ちようどどのような文化復興運動が生まれて育まれていた頃、「瑪家ダム」の建設予定地として屏東県の山間部の南隘寮溪と北隘寮溪が交わる地点を政府が選ぶつもりであるというニュースが伝わって来た。瑪家ダムの計

画は遠く西暦二〇〇五年以降に屏東、高雄、台南など農工業の盛んな南部主要都市や県が直面する水不足解消のために政府が立案したものである。經濟部水資源規格委員会立案の計画によれば、このダムの総工費は一〇〇〇億台湾元(約四〇億ドル)、高さ一六七メートル、完成すれば台湾で第三番目に大きいダムとなる。完成後、隘寮溪下流の二つの村落が湖底に沈む。一つが新好茶村(人口四三二人)で、もう一つが魯凱人と排湾人とが各々人口の半分を占める伊拉部落(人口一五〇人)である。もし瑪家ダムの計画が政府関係機関を順調に通過すれば、工事は一九九八年に着工し、二〇〇七年には完成する予定である。

このダム建設のニュースに好茶の人々は非常に驚いた。一九九四年四月霧台郷民代表議会でダム建設反対の決議がなされ、五月には村民がダム建設に反対の署名をするなど、さまざまな抗議活動を行った。好茶村では七月に「好茶地区瑪家ダム反対自救会」が結成され、一連の抗議行動を展開した。自救会会長は名をタイパン・サレ(Taipan Sasale)といい、村内では数少ない大学卒のエリートであった。彼はこの会が結成されて間もなく、好茶の村民を連れて屏東県政府の前でダム建設取り消しの請願と抗議を行った。彼らは伝統的な衣装に身をつつみ、歌や舞をもって請願した。だが県知事に接見できるところか、「集会デモ法」違反で警察によって立ち退かされた。さらにリーダーのタイパン・サレは地方裁判所に起訴された。だが、彼は漢人の法律に従うことに同意せず、裁判所への出廷を拒否した。そのため裁判所は彼を指名手配した。タイパン・サレは逃亡したものの、翌年八月二五日に逮捕された。九月二日の法廷で彼は次のように答弁した(呉錦発、一九九五)。

我々台湾原住民はこれまで緑の山を父とし、青き水を母としてきた。私たちの伝統は山を敬い水を拝むことである。しかし台湾漢人政府はこれらの神々が与えた美しい世界を度々破壊してきた。……裁判官、なぜ民衆を引き連れ抗議したのかとの質問に対し、私はこうお答え申し上げます。先ほど述べました土地への

愛からであり、その愛が今日私をここに立たせているのです。

地方裁判所の判決は五〇日間の拘禁刑であった。結局、彼はその刑を罰金をもってかえたが、この事件はタイパン・ササレを村の英雄人物にし、また全国紙に連日報道されたため、マスコミの注目を浴びていた。目下、自教会は好茶の人々と霧台郷のキリスト教会（長老派）の協力を得て、抗議活動を続けている。

### 先住民の「原野倫理」と「大武山永続文化生態地区」のダム代替案

魯凱族のダム反対運動では、『原報』（一九八九年から発行）という雑誌がダム反対の主張の論説の場となった。タイパン・ササレが一九九三年からその雑誌社社長を勤めていた。その雑誌の論説から引用し、彼らの環境に対する概念を以下で論じる。

まずは瑪家ダム反対自教会が請願活動をした後に発行された『原報』第二五期（一九九四年八月一〇日）の一面に掲載された「社説」からである。「雲豹民族の故郷を救う」と題されていたこの社説は、ダム反対を明確にしたダム反対論述の最たるものである。

魯凱族は高山の民族である。そして高山から流れる川と調和依存の関係をこれまで保ってきた。山と川と泉は一体であり、山の緑と水の青さはともに命を育む重要な景観である。……旧好茶は隘寮溪の源流域にあり、隘寮溪は好茶の人々の清き水源となる。その恵みゆえに彼らは水源の清冽さを保つのである。これが自然と土地に対する先祖代々からの我々の倫理である。それは隘寮溪の水が生命と文化を育む母だからである。

隘寮溪流域は大武山脈の呼吸系統にあたる。ダム建設はその流域の生態体系を破壊するものであり、台湾に

唯一残された野生動物の楽園をも消滅させるものである。天上にて祖先が首を振り涕泣する今、魯凱族の命の存続のために、魯凱族と排湾族の社会全体の発展と文化継承のために、我々は大武山山上の祖霊に誓う。好茶村の民は魯凱やその他の先住民とともに「出草」（先住民は首狩りをこう称する）抗争する。生死を賭けて千数百年來祖先から伝えられてきた土地を守るのである。

この文章では魯凱族の文化の観点からダム建設反対を訴えるほかに、ダムの代替案も提示している。

我々は政府に強く要望する。瑪家ダムは台湾南部の水不足を解消する唯一の方法ではない。瑪家ダムの建設を中止し……、「大武山永続文化生態地域」を設けるのである。そこでは山林を用いて水源を確保し、民族文化の存続を図り、自然生態を守るのである。先住民と大自然との調和共存をもって、生態体系のバランスを保ち、科学技術の知識をもって、山林を水源として機能させるのである。

この理念は第二七期『原報』（一九九五年七月一日）に掲載されたタイバン・ササレ署名の「原野倫理」でも示されている。その中で彼は「森林ダム」の概念を提示し、森林ダムの展開は川の上流や水源の破壊を止める根本的な方法であると述べている。先住民の伝統的な水源利用の哲学は大自然とのバランスであり、過度の利用をしないことである。自然の再生力と循環の原理により持続可能な利用を図ると提言する。

ササレはまた「新興民族への遺憾と希望」（同書）と題する文章のなかで、台湾四〇〇〇年の歴史観に反対している。この歴史観はもともと今日台湾社会における独立論者が中国統一論者の中国五〇〇〇年の歴史観に対抗して出した反対論述である。

漢人四〇〇年の枠組みで台湾の歴史を解釈しようとすることは、実は帝国主義史観、いわゆる「発見」の枠組みで台湾を認識することなのである。それは四〇〇年前先住民が住んでいた台湾を暗黒な、野蛮な、歴

史のないものとして見なすことを意味する。……初期の台湾移民社会の「海賊経験」や「博徒性格」、「開拓精神」は、先住民には被「収奪」と被「侵略」の始まりであった。……漢人の移民文化には「破壊、放棄、移動」という欠陥があり、それは「海賊精神」である。この精神は対外貿易の開拓のみに使える。……台湾での多元的文化の構築や新興民族の形成のためには、中国や日本、並びに西洋社会のものを具備するだけではなく、もつと重要なことは台湾がすでに先住民の文化の影響を受けていることに目を向けることである。……先住民抜きで十全な「台湾新興民族」を一体どうすれば建設できるのかと私は問いたい。……不断の学習が移民社会の長所である。今こそ、台湾社会は自分たちがすでに忘れた東方民族の土地倫理、大自然との調和、持続可能な自然の営みの精神を先住民から学ばなければならない。

この論述は台湾四〇〇年の歴史観の持つ自文化中心主義を指摘し、さらにそのような歴史観から生み出された移民文化には、環境に対して破壊的であると述べている点で、漢人の文明へ向けられたこれまでにない厳しい批判である。先住民は土地、自然およびそれらの永続的な利用開発の観念において、未曾有の誇りを感じ、漢人にその観念を学ぶように求めており、彼らはもはや漢人に同化させられる弱小なエスニック集団ではないのである。それにもかかわらず、漢人側はこれまでに反論さえせず、逆に他の論述に依拠してダムの建設を支持しているのである。

### ダム建設派―行政側の論述―

瑯家ダムの建設は現在に至ってもその政策の制定手続きさえいまだに終わらない段階にありながら、行政当局はすでにダム建設の広報を行い、建設開始に向けての根回しをしている。屏東県知事伍沢元の言論は中央の命令

を受けてダム建造を執行する第一線の行政官僚の立場を代表する。彼は地方議員の質問に答えて、移住する住民への特惠的補償条件を幾度も強調している。台湾史上最も高い土地代償金のほか、当地での就職と繁栄を約束し、観光開発を提唱している。移住先を「先住民文化模範地域」とし、すべての家屋にバス・トイレ付きの部屋を二つ設けて、「民宿」を経営できるようにし、観光開発の基盤にするというものである。上記等の条件で彼は住民からの同意を得ようとしている。さらに彼は現代の科学技術の発達を強調し、地質的問題が防止できること、ダムが地震に耐え得ること、ダム建設後の悪影響がないことを保証している（『民衆日報』一九九五年一〇月二五日）。

呉建民氏は台湾全土の水資源計画を主管する經濟部の「水資源会」主任委員である。彼の言論はダム計画の担当機関を代表している。呉氏は水資源会成立四〇周年を記念する本のなかで「邁進する二一世紀の水資源事業」と題する一文を寄せている。その中で彼は次のように述べている。

事実、我々人類は生物生存の法則―適者生存と自然選択説から脱け出ることにはできない。二一世紀は激しい競争の時代となろう。また財政経済の競争の時代となろう。多くの人がその激しさに驚きあされるだろうが、その競争から逃れることはできない。ただし、これは平和で自由な競争であり、国際化と民主化の競争である。このような状況のもと、私たち人類が生存していくには、競争しなければならない。どの地域でも競争が必要である。この競争によって地域の発展があるのである。競争しなければ、我々は地球上から淘汰される。一〇年前から二〇年前フィリピンの所得は我々よりも高かった。だが、彼らには競争がなかったため、今では落ちぶれてしまった。……台湾が今後中程度の経済成長率をすると予測して、台湾地区の水資源の供給計画を立てている。各地区の水資源開発のプランは生活用水と工業用水の需要を満たすことを主要な目的としている。……二一世紀、人口は絶え間なくふえ、都市に集中する。そのため水資源事業は都市化する将来

において重要であり……。二一世紀までにわが国が先進国家仲間入りをするためには、水と関連する各種事業の推進発展が必要かつ重要なのである。

ダーウィンの進化論を彷彿させる呉氏の発言は、主に台湾の二一世紀を都市化と工業化の時代と考える彼（または政府）の青写真に基づくものである。その発言は行政機関の水資源政策を弁護するものとなっている。

そして李登輝總統の地方政府への指示ほど、台湾官僚の環境への観点をはつきりと示したものはない。李登輝總統は一九九五年八月二〇日に屏東の牡丹ダムを視察した。その時に總統は「高雄市の水質は非常に悪い。鳳山ダムの水は人が飲むことができない。私は瑪家ダムが早く完成し、高雄市民がきれいな水を飲めるよう望みます」（『中国時報』一九九五年八月二一日一面）と語った。大勢の人間（高雄地区人口二〇〇万人弱）の要望に答える最高行政首長である總統のこの種のリップサービスは、行政側の単純な考えを端的に示している。年末の国会議員の選挙と一九九六年春の總統選挙を控え、民主政治体制の論理は、多数者（高雄市民）の幸福と利益を優先にすべきというものである。

台湾当局の考えを示す以上行政官三名の言論は、権力的に優位な立場からなされた言説であると言えよう。そういう言説に代表される知識体系は権力に支えられ、一種の文化ヘゲモニー的論述をなしている。それは官僚が代表する今日の漢人文明の環境への思考モデルと先住民の思考モデルとが全く異なるものであることを意味している。

## 四 結び―環境問題における文化、歴史、民族の葛藤―

ここまで台湾の魯凱族における民族誌的状况および瑪家ダム反対運動の内実を論じてきた。民族誌的資料に表れるように魯凱族の環境観念は文化との緊密な共生関係にある。動物、山、森、川、水そして土地に対する畏敬の念は、後から台湾に入ってきた漢民族の移民文化とは異なるものがある。つまり魯凱人にとって人間の住んでいる周りの生活空間を失うこと自体、文化を死なせることと同様の意味をなす。彼らの文化にとって自然の占める比重の大きさは台湾の漢民族にみられない。

台湾の漢人は明朝末期（一七世紀）の戦乱や大陸東南部の人口増加による生活難から逃れるため、大量に台湾に移住してきた。彼らは「唐山」という故郷意識を強く持っており、いずれは「故郷に錦を飾る」考えをもって来た。また農耕文明を長い間保持してきた漢人は諺に示されるように「人間が天（自然）に必ず勝つ」と信じてやまなかった。そして数百年にわたる努力によって、新天地を自分たちの故郷と地形に似たものに作り変えようとしてきた。一九世紀末から五〇年間にわたる日本による植民地統治の下では、山林資源の収奪や同化政策など、言うまでもないことであった。そして一九四五年以降、中国大陸での内戦に破れた国民党に従って、多くの戦争難民が台湾に来た。彼らも祖国大陸への思いは強く、いずれは故郷に帰れると思いついて来た。このような移民者、植民者や難民の持つ精神的文明には自然の重みはなかなか感じられない。むしろ生存競争の占める比重が大きい。

近年人類生態学者がしばしば論じるように、自然環境により優しい文化は最終的により持続可能な文化となる

のである (Milton, 1993)。本来、台湾先住民の持つ山地焼畑農業と漢民族の水田灌漑式農業のどちらが台湾という島の自然環境により適しているのか環境問題として多に議論すべきところなのであるが、しかし、魯凱族の好茶村の事例が端的に示すように現時点では先住民の生活様式はもはや過去には戻れない。また、漢民族の方も水田農業文明から、工業化都市型文明に速いテンポで変身しつつあり、国際経済の競争システムにはめ込まれてしまった。

そして二〇世紀末の今日に、一つのダム建設計画によって触発された自然環境に対しての議論をめぐって、台湾における「先住民 vs 移民、植民、難民」の対立が露呈し始めた。しかしそれが発展競争の下で、民主主義の「マイノリティ vs マジョリティ」の概念の枠組みに置き換えられる傾向がある。果たして都市に住む多数者の人の幸福に少数者が犠牲になるべきかどうかは、本稿で論じる余裕はない。だが、今回のダム建設抗争にかかわる魯凱族の言葉には、長い間抑圧された彼らの怒りがあふれている。この事件が契機となって、彼らは環境主義の代表者として強く台湾の漢人文明、またその歴史の解釈権に対し批判を始めた。そして一方、先住民、移民、植民、難民が一体となった「台湾新興民族」の一員として参入したい意欲をもみせている。しかし、漢民族の主導する行政側は経済発展、民主主義の旗をふり上げ、権力的言説をなしており、環境問題における文化、歴史、民族的な葛藤に解決の糸口さえつかめない状況である。双方が交わるのではない平行線のまま進んでしまうことは、現在台湾の環境問題にとって最大の難問となるであろう。

(魯凱族の調査にあたって、アオヴィニ・カロス氏およびタイパン・ササレ氏をはじめ好茶村の人々にいろいろ教わった。日本語原稿の作成に当たっては上水流久彦氏に多大なる協力を得た。上述した諸氏に感謝をしたい。)

引用文献

- Cohen, Barri 1994 "Technological colonialism and the politics of water" *Cultural Studies* 8(1): 32 - 55. London : Routledge.
- Milton, Kay (ed.) 1993 *Environmentalism : The view From Anthropology*. London : Routledge.
- Wittfogel, Karl August 1957 : *Oriental Despotism : A comparative Study of Total Power*, New Heaven : Yale Univ. Press.
- 笠原政治 一九九三、「私たちの結婚はまるで喧嘩のようだ——台湾ルカイ社会における地位ハイアラーキーと配偶者選択の過程——」『横浜国立大学人文紀要』三九：一〇一——一二二。
- 吳建民 一九九五、「邁向二十一世紀水資源規劃与開發」, 經濟部水資会 (編) 『水資源統一規劃委員會成立四十周年紀念專輯』台北：經濟部水資会。
- 吳錦發 一九九五、「漂亮的民族」『民衆日報』一九九五年九月三日、高雄：民衆日報社。